

松山城の沿革

松山城は、海拔132mの勝山山頂に本丸、中腹に二之丸、山麓に三之丸(堀之内)を置く連郭式平山城で、敵の侵入を防ぐため、二之丸を取り囲むように山麓から本丸にかけて、全国的にもめずらしい「登り石垣」が配されている。

松山城の創設者は加藤嘉明である。慶長5年(1600)の関ヶ原の戦いにおいて徳川家康側に従軍し、その戦功を認められて20万石となった嘉明は、同7年に伊予正木(愛媛県松前町)から道後平野の中央にある勝山に城郭を移すため、普請奉行に足立重信を命じて地割を行い工事に着手した。翌8年(1603)10月に嘉明は居を新城下に移し、初めて松山という名称が公にされた。

その後も工事は継続され、寛永4年(1627)になってようやく一応の完成をみた。当時の天守は五重で偉観を誇ったと伝えられる。しかし嘉明は松山にあること25年、完成直前の寛永4年(1627)2月に会津へ転封される。そのあとへ蒲生氏郷の孫忠知が出羽国(山形県)上の山城から入国し、二之丸の築造を完成したが、寛永11年8月参勤交代の途中、在城7年目に京都で病没し、嗣子がないので断絶する。



その後、寛永12年(1635)7月伊勢国(三重県)桑名城主松平定行が伊予松山15万石に封じられた。寛永16年(1639)定行は、3年の年月をかけ、築城当時五重であった天守を三重に改築する。これは地盤の弱さに起因する天守の安全確保とも、江戸幕府に配慮したためともいわれている。

ところが、9代松平定国(8代將軍徳川吉宗の孫)の天明4年(1784)元旦、落雷で天守が焼失した。焼失後37年を経た文政3年(1820)、父定国の遺志を継いだ11代定通は、復興工事に着手するが、着工16年にして、定通の逝去と作事場の火災で頓挫する。これを引き継いだ12代藩主松平勝善は、弘化4年(1847)城郭復興に着手、ようやく安政元年(1854)悲願の天守が復興した。

これが現在の天守で、姫路城と並ぶ典型的な連立式天守をもち、慶長期の様式を引き継ぐ、わが国最後の完全な城郭建築といわれる。



松山城年表

西暦	城主名	居城年(治封年数)	摘要
1603	加藤 嘉明 (禄高20万石)	慶長 8 年 (25)	慶長6年築城許可、同7年(1602)着工し同8年正木城より移る。天守五重。寛永4年会津40万石に転封
1627	蒲生 忠知 (禄高24万石)	寛永 4 年 (7)	蒲生氏郷の孫、出羽上の山城より移封、二之丸完成 寛永11年逝去、嗣子なく断絶
1635	松平 定行 (禄高15万石)	寛永12年(24)	寛永12年伊勢桑名より転封、徳川家康の異父同母弟松平定勝の子 寛永19年天守を三重に改築
1658	同 定頼	万治元年(5)	
1662	同 定長	寛文 2 年(13)	
1674	同 定直	延宝 2 年(47)	今治藩主松平定時の子、延宝2年就封
1720	同 定英	享保 5 年(14)	
1733	同 定喬	享保18年(31)	
1763	同 定功	宝暦13年(3)	
1765	同 定静	明和 2 年(15)	
1779	同 定国	安永 8 年(26)	天明4年(1784)天守落雷で焼失
1804	同 定則	文化元年(6)	
1809	同 定通	文化 6 年(27)	文政3年(1820)天守再建工事にかかる
1835	同 勝善	天保 6 年(22)	安政元年(1854)天守再建なる(現存)
1856	同 勝成	安政 3 年(13)	
1867	同 定昭	慶応 3 年(1)	
1868	同 勝成 (再任)	明治 1 年(2)	松平姓を返上し旧姓の久松となる
1869		明治 2 年	版籍奉還、明治3年三之丸全焼、同5年二之丸焼失
1923		大正12年	久松定諱伯より城郭を寄贈され松山市の所有となる
1933		昭和 8 年	小天守、南北隅櫓、多聞櫓など放火のため焼失
1945		昭和20年	乾門など戦火のため焼失
1958		昭和33年	馬具櫓を鉄筋で復興
1968		昭和43年	小天守、南北隅櫓、多聞櫓、十間廊下などを木造で復興
1971		昭和46年	筒井門を木造で復興
1972		昭和47年	太鼓門を木造で復興
1973		昭和48年	太鼓櫓を木造で復興
1979		昭和54年	天神櫓を木造で復興
1982		昭和57年	乾門・乾門東統櫓を木造で復興
1984		昭和59年	長門・長門東統櫓を木造で復興
1986		昭和61年	巽櫓を木造で復興
1990		平成 2 年	太鼓門西堀を復興
2006		平成18年	天守など7棟保存修理工事完了